

史 朋

第 45 号 2012 年 12 月

論 文

明・宣徳朝の総兵官 (一).....奥 山 憲 夫 (1)

謝遂『職貢図』にみえるアイヌのイナウカサについて.....中 村 和 之 (1)

彙 報..... (38)

北海道大学東洋史談話会

論 文

謝遂『職貢図』にみえるアイヌのイナウカサについて

中 村 和 之

はじめに

アイヌ民族誌の研究は、これまで主として日本語の文献によってなされてきた。これ以外には、アイヌ語の口承文芸や、少数のヨーロッパ文献が手がかりになるにすぎなかったため、それは当然のことでもあった。しかしそのことが、研究にある種の限界を与えてきたともいえるのではないか。筆者は、元・明・清代の漢語・満洲語史料を用いて、アイヌ史の研究を進めているが、そこからうかがい知ることができるアイヌの姿やアイヌ文化は、日本語史料から導き出されたそれとは食い違いをみせることがある。漢語・満洲語史料にも中華思想に基づく偏見をうかがうことができるから、むやみに漢語・満洲語史料を信じることはできないが、日本語史料の信頼性を再検討する手がかりになることは事実であろう。また、日本語史料が記録しなかった新しい事実が解明される可能性もある。

小論では、カラフトアイヌ¹の男性が用いるイナウカサ²を題材に、18 世紀中葉に成立した謝遂『職貢図』を手がかりとして、アイヌの物質文化の一側面について検討を加えてみたいと思う。

1. 謝遂『職貢図』にみえる「草の笠」・「草の編み帽子」

謝遂『職貢図』は、清朝の乾隆帝の勅命により 1751 年（乾隆 16）から編纂が始まり、1761 年（乾隆 26）に完成した本である。この本は、当時清朝と朝貢関係を結んでいた各地域の人びとを、男女それぞれに絵に描き、さらに漢文と満洲文で簡単な説明を加えた、満漢合璧の形式を取っている。この本の巻 2 に「庫野」という条がある。庫野とは、オルチャ語などのツングース諸語あるいはニヴフ語などでアイヌを意味する kuyi~kuyi~kui を漢字の音で表したもので、元代の史料では「骨嵬」、明代の史料では「苦兀、苦夷」などと表記された。謝遂『職貢図』巻 2、庫野には、清代の漢語・満洲語史料としては、アイヌについてまとまった記述が残されており、18 世紀半ばの時点で、清朝がアイヌについてどのような知識を持っていたかを示すものである。なお『皇清職貢図』は、謝遂『職貢図』にもとづいて編纂された本である。『皇清職貢図』には、乾隆刊本とこれを重刊した嘉慶刊本があり、さらに四庫全書本がある³。『皇清職貢図』は漢文だけが記され、満洲文の記述はない。謝遂『職貢図』と二種類の『皇清職貢図』の間

¹ アイヌ民族のなかで、サハリン島（樺太）に居住していた人びとについては、樺太アイヌ、サハリンアイヌなどいくつかの呼び方がある。本稿では、近年の自称に従い、「カラフトアイヌ」という呼び方を用いる。

² 拙稿「アイヌのイナウカサ」（『Arctic Circle』第 12 号、1994 年）。

³ 榎一雄「異民族のファッション・ショー——皇清職貢図——」（『榎一雄著作集 第 7 巻 中国史』汲古書院、1994 年）。

には文や絵に違いがみられる。前者の方がより正確と考えられ、アムール河下流域に住む諸集団の衣服や生活に関して、謝遂『職貢図』ほどまとまった史料はほかに存在しない⁴。『皇清職貢図』の原本については、鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』に言及がある程度であったが⁵、1989年に莊吉発氏が、台湾の国立故宫博物院に所蔵されている謝遂『職貢図』の訳注を発表され⁶、その存在が知られるようになった⁷。

ではまず、謝遂『職貢図』巻2、庫野、及び『皇清職貢図』巻3、庫野、の嘉慶刊本と四庫全書本、三種の漢文を対校する。

庫野、庫野居東海島之雅丹・達里堪等處⁸。男則薙頂心以前之髮⁹、而蓄其後、長至肩即截去。草笠布衣、綴紅布卅字于¹⁰肩背¹¹間。亦有衣魚皮者。性好鬪¹²、出必懷利刃¹³。婦女幼時即以針刺¹⁴唇、用烟煤塗之。土語謂之庫野話、歲¹⁵進貂皮。

以下に漢文の訳を掲げる。

庫野、庫野は東の海島の雅丹・達里堪等の処に居んでいる。男は則頂心以前の髪を薙り、其の後は蓄え、長びて肩に至れば即ちに截去る。草の笠と布の衣で、紅い布に卅の字を肩と背の間に綴る。亦た魚皮を衣する者が有る。性は鬪を好み、出には必ず利な刃を懷する。婦女は、幼い時に即ち針で唇を刺し、烟煤を用いて之に塗る。土の語は之を庫野話と謂い、歳に貂の皮を進している。

つぎに、満洲文の逐語訳を掲げる¹⁶。

⁴ 松浦茂『繊維製品の流入と辺民社会』（松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、2006年）428頁。

⁵ 鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』（『鳥居龍蔵全集』第12巻、朝日新聞社、1976年）232～233頁には、鳥居の1905年の奉天調査について以下のような記述がある。

私も毎日清寧宮に通い、同宮に奉祠するシャーマン教(Shamanism)の諸神やその祭事器具などや、同宮に蔵する『皇清職貢圖』の原本など調査し、次いで奉天郊外の東陵、西陵に行った。

⁶ 莊吉發『謝遂《職貢圖》滿文圖說校注』（國立故宮博物院、1989年）。

⁷ 国立故宮博物院所蔵本のほかには、中国歴史博物館蔵『皇清職貢図』の彩色図が、李沢奉・劉如仲編著『清代民族図志』（青海人民出版社、1997年）に掲載されている。また、フランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)にも別写本が収蔵されているが、それらの写本の関係は不明である。

⁸ 『皇清職貢図』嘉慶刊本では「處」である。

⁹ 謝遂『職貢図』の莊注⁶同書、『皇清職貢図』嘉慶刊本、『皇清職貢図』四庫全書本では「髮」であるが、国立故宮博物院所蔵本では「髮」となっている。

¹⁰ 『皇清職貢図』嘉慶刊本、『皇清職貢図』四庫全書本では「於」である。

¹¹ 『皇清職貢図』四庫全書本では「臂」である。

¹² 謝遂『職貢図』の莊注⁶同書では「鬥」であるが、国立故宮博物院所蔵本の表記に従う。なお『皇清職貢図』嘉慶刊本、『皇清職貢図』四庫全書本では「鬪」である。

¹³ 莊注⁶同書、『皇清職貢図』四庫全書本では「刃」である。

¹⁴ 『皇清職貢図』嘉慶刊本では「刺」である。

¹⁵ 謝遂『職貢図』の国立故宮博物院所蔵本ならびに『皇清職貢図』嘉慶刊本では「歲」、『皇清職貢図』四庫全書本では「歳」である。

¹⁶ 莊注⁶同書、177頁。なお、莊氏によるローマナイズには一部に誤りがあるので改めた。この点については、津曲敏郎氏と承志氏のご教示をいただいた。

guye¹⁷, kuye, dergi mederi tun i yadan darikan i jergi bade tembi, hahasi oci, クイエ、クイエ、東の海島のヤダン・ダリカンの等の地に住む。男たちは、foron i julergi funiyehe be fusifi amargingge be sulabumbi, mutufi meiren de つむじの前の毛を剃りその後ろはのばしておき、のびて肩に isinaha manggi uthai hasalambi, orhoi sekiyeku bosoi etuku etumbi, 近付いたら直ちに裁ち切る。草の編み帽子(と)布の衣服(を)着用する。

fulgiyan boso i araha 卅 sere hergen be meiren fisa de hadambi, nimaha i sukū 赤い布で作った卅という文字を肩(と)背中に取りつける。魚の皮 be eturengge inu bi, banin beacunure de amuran, tucike dari urunakū を着用することもある。気性(は)争いを好み、外出する毎に必ず dacun loho ashambi, hehesi oci, ajigen fon ci uthai anggai femen be ulme i 鋭利な腰刀(を)帯びる。女たちは、幼い頃から早々と口の唇を針で tokofi ku i ijumbi, ceni ba i ici gisurere be kuyedembi 刺し鍋ずみで塗る。彼らの土地の方角(で)話すのはクイエ語で話す sembi, aniyadari seke jafambi. という。毎年貂の皮(を)納める。

最後に、満洲文の訳を掲げる。

クイエ、クイエは、東の海島のヤダン・ダリカンなどの地に住む。男たちは、つむじの前の毛を剃り、その後ろはのばしておき、のびて肩に近づいたらすぐに切る。草の編み帽子と布の衣服を着用する。赤い布で作った卅という文字を、肩と背中に取りつける。魚の皮を着用することもある。気性は争いを好み、外出することには必ず鋭利な腰刀を帯びる。女たちは、幼い頃から早々と唇を針で刺し鍋ずみを塗る。彼らの土地の方角で話されるのはクイエ語である。毎年貂の皮を納める。

ここでいう海島とは、サハリン島のことである。松浦茂氏の見解によれば、雅丹(yadan)とは姓の名であり¹⁸、この姓にはナヨロのアイヌが属する。また達里堪(darikan)は、サハリン島東海岸のタライカと考えられる¹⁹。前頭部の髪を剃り落とす習慣は、アイヌの男性にみられ、児玉作左衛門氏らの指摘によれば、カラフトアイヌは北海道アイヌより広く剃りあげるといふ²⁰。衣服につける卅の字とは、アイヌの切り伏せ文様のことと考えられるし、女性の入れ墨も良く知られている。漢文と満洲文の内容を比較すると、女性の入れ墨に漢文では「烟煤」を用いるとだけされているのに、満洲文では

¹⁷ この部分は原書では guye であるが、莊氏が指摘されるように kuye の誤りと考えられる(莊注⁶同書、177頁注1参照)。

¹⁸ 松浦茂「間宮林蔵の著作からみたアムール川最下流域地方の辺民組織」(『神田信夫先生古稀記念論集 清朝と東アジア』山川出版社、1992年)157頁。

¹⁹ 松浦茂「1727年の北京会議と清朝のサハリン中・南部進出」(松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、2006年)113頁。

²⁰ 児玉作左衛門・伊藤昌一「アイヌの髪容の研究」(『北方文化研究報告』第5輯、1941年)。同「アイヌ髪容の研究補遺」(『北方文化研究報告』第6輯、1942年)。

「鍋ずみ」²¹ となっていることなど微妙な差異がある。漢文の「草の笠」は、満洲文では「草の編み帽子」とより詳細に表現されている。

このように、謝遂『職貢図』や『皇清職貢図』の記述は、アイヌの生活文化を記したものとすることができが、男性の髪型や魚皮衣の着用などからみて、特にカラフトアイヌの生活文化の記録と考えるのが妥当であろう。ただ、ここで男性がかぶる「草の笠」・「草の編み帽子」がどのようなものであるかが明らかでない。アイヌのかぶりものは、熊の毛皮や木綿などで作った頭巾や「マタギボッチ」²² などが知られているが、「草の笠」・「草の編み帽子」は一般的ではない。

では、この「草の笠」・「草の編み帽子」はどのように描かれているのか。謝遂『職貢図』〔図1〕、『皇清職貢図』嘉慶刊本〔図2〕、四庫全書本〔図3〕の各本に収められた図を掲げる。謝遂『職貢図』は彩色本なので参考になるが、形でみれば嘉慶刊本、四庫全書本とも大きな差があるわけではない。庫野の男性がかぶっている帽子が、「草の笠」・「草の編み帽子」とされるものだが、全体的に丸みを帯びた重ね餅状の形状をしており、笠の頂上の部分につまみ状の突起がみえる。筆者は後述するように、これをカラフトアイヌのイナウカサではないかと考えているが、その考察に入るまえに、イナウカサについて検討しなければならない。

2. 「草の笠」・「草の編み帽子」とイナウカサ

イナウカサは、これまでの北海道アイヌの物質文化の研究によれば、アイヌ社会に広く見受けられるものとはいえない。イナウカサについて、佐々木利和氏はつぎのようにいっている²³。

樺皮製の笠とは別に、イナウカサ（たんにカサとも）という山高帽子のようなかっこうをした笠を樺太アイヌは用いている。イナウカサのことばがあらわしているようにイナウ（削りかけ）で作った笠である。ヤナギやミズキなど白い肌の木をうすく削いで削りかけを作り、それを縄のように長く縛って、山高帽子のかたちにつばを広く巻き上げていく。つばの周縁や成形と強化目的の飾り板は鯨の髭などで作る。巻き上げていく削りかけは俵のようにいらくさなどの鞣皮の糸で編み上げる。鯨の髭の飾り板は頭頂部でまとめ、そこにやはり削りかけを編んで作った小円盤をはめる。そのさまはあたかも兜の鉢の天辺の穴から烏帽子がのぞくに似ている。

また名取武光氏はつぎのようにいっている²⁴。

樺太アイヌは削り花を撚ったものを横糸とし、蓴麻或は樹皮を縦糸として、千島アイヌの編方と同



図1. 謝遂『職貢図』巻2、庫野



図2. 『皇清職貢図』巻3、庫野（嘉慶刊本）



図3. 『皇清職貢図』巻3、庫野（四庫全書本）

じ手法で造るが、縦糸の間隔は1糎乃至1.5糎位あって千島アイヌのそれに比較して遥かに荒い。形は頭頂部に、別に鐔形の編物を着け、編み始めの所からの浸水を防ぐと同時に、突起を出してつまみとしてゐる。材料が削花であるばかりでなく、縦糸が少ない上に之を斜に編み下してゐる為に、全体に力がないので、頭頂部から4本の木片を方射形に附けて力を持たせてゐる。此の形は山靱地方から伝つたものらしい。

現在までにその存在が確認されているイナウカサは、以下の3点である。

①北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園蔵「笠」〔図4〕²⁵

アイヌ名「カサ」。サハリン島（樺太）で、1879年に収集されたもの。削りかけをよったものを横糸とし、いらくさ或は樹皮を縦糸として頂頭部の部分から編んだものである。ツバ径34.5cm、高さ15cm。

²⁵ 難波琢雄「イナウカサ」（『北海道新聞』1982年6月24日朝刊）。

²¹ 鍋墨については、松浦武四郎『北蝦夷録』（吉田武三編『松浦武四郎紀行集（下）』富山房、1977年、568頁）に、以下の記述がある。

余爰にて矢立の墨薄くなりしかば、木切もて水を入接居たりしかば、老人一枚の鍋を持来りて是を伏せ、その下にて樺皮を焼き、その油煙を鳥の羽にて拂ひ、矢立に入れ呉たりけるが、少しも墨に異る事無りしかば余も厚く謝せしが、……實に不自由なれば又それなり事済かと感じ侍りぬ。

²² クライナー・ヨーゼフ「北海道における和人とアイヌとの文化接触に纏わる諸問題 —ヨーロッパに所蔵されている通称『アイヌ帽子』を例にとつて—」（『北海道を探る』第12号、1986年）。

²³ 佐々木利和『アイヌの工芸』（『日本の美術』第354号、至文堂、1995年）47頁。

²⁴ 名取武光「北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説」（『アイヌと考古学(1) 名取武光著作集I』北海道出版企画センター、1972年）98～99頁。

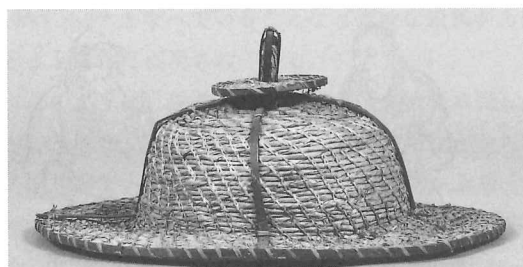


図4. 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園蔵「笠」

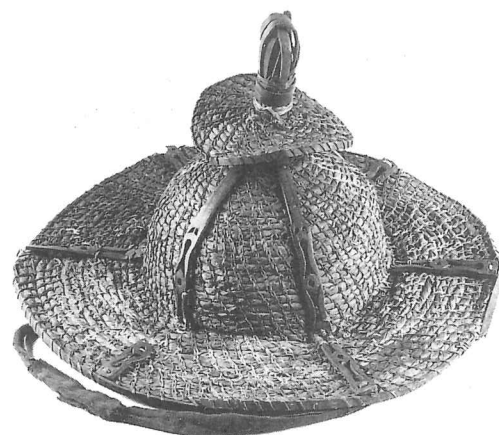


図5. ベルリン国立民族学博物館蔵「夏の帽子 (イナウカサ)」



図6. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館蔵「帽子」

②ベルリン国立民族学博物館蔵「夏の帽子 (イナウカサ)」〔図5〕²⁶

ノルウェーの船長・ヤコブセンが、1885年にサハリン島で収集したもの。男の夏の笠という。木を薄く削いだ削り掛けを巻き上げて帽子状に作る。補強用の飾り板は鯨髭製。アイヌ語で“inao kasa” (イナウの笠) または “inau chaka” という。佐々木利和氏は “inau chaka は inau kacha の誤か” としている²⁷。ツバ径40.2cm、高さ25cm。

③ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館蔵「帽子」〔図6〕²⁸

ポーランドの民族学者・ピウスツキが、1906年頃にサハリン島で収集したもの。アイヌ名「イナウ ラハ

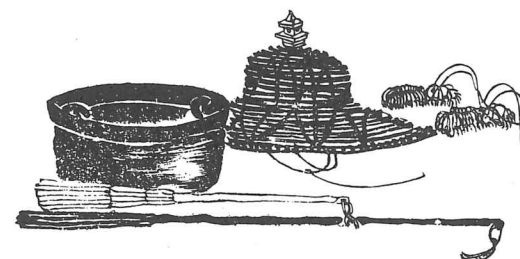


図7. 松浦武四郎『久摺日誌』より「笠」

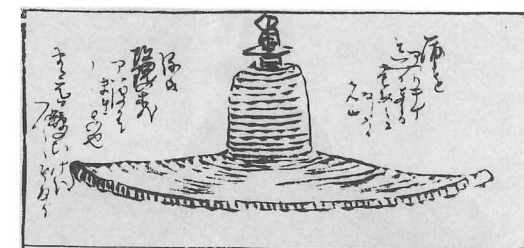


図8. 松浦武四郎『西部能登呂誌』より

カサ (イナウのつばの帽子?)」。削掛で編みあげたもの、頂部にヤナギ樹皮製飾付。外径33.5cm。

このように、現存する資料はいずれもサハリン島で作られたものと思われる。謝遂『職貢図』・『皇清職貢図』の笠と比較すると、両者の形態がよく似ていることがわかる。ただ、これらの資料のほかには、イナウカサの性質をより詳しく解明するための手がかりは残されていない。そこでつぎに、絵画史料に見えるイナウカサについて検討してみよう。イナウカサについて最も詳細な記録を残しているのは、北海道・サハリン島の探検と地図作成で有名な松浦武四郎である。

④松浦武四郎『久摺日誌』より「笠」〔図7〕²⁹

武四郎は、ビホロで出会ったシユイヘリキンという老人から作ってもらった笠のことを紹介している。武四郎は、笠の絵に「笠、柳を削り是を麻にて編ミし物也。其上へ鯨の髭を附、力をもたすなり。」という説明を加えている。美幌は、北海道オホーツク総合振興局管内にある町の名である。

⑤松浦武四郎『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』第23巻「西部能登呂誌」〔図8〕³⁰

武四郎は、ノトロ湖に漕ぎ出すところで、「依て是よりはコタンチシをも召連、同所のカシユワ老爺、瘡瘻 (瘡) のチャレイユクと、アバシリより舟にて来りしシタ・ウケと五人を召連出船するに、此処の者は皆キナ草にて作りし笠を一同用ゆ。実に其風又一種のもの也。」とのべている。また、絵につけた説明では、「蒲をアフリキナといへるものにて巻あみになしたる者也。」「縁は玫瑰の木をアツ皮にてまきしもの也。」「また是に鯨のひげをつけしもあり。」ともいっている。網走は、北海道オホーツク総合振興局管内にある市の名である。

このように武四郎は、イナウカサという名称はあげていないが、イナウカサが美幌・網走などのオホーツク海沿岸地域に分布していたことを記している³¹。武四郎の記録のほかには、つぎのようなものがある。

²⁶ 東京国立博物館編『特別展観「アイヌの工芸」』(東京国立博物館、1993年)85頁、107頁。

²⁷ 注²⁶同書、107頁。

²⁸ SPb-アイヌプロジェクト調査団編著『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』(草風館、1998年)27頁、171頁。このほかに、古原敏弘氏より見せていただいた調査カードの記載を参照した。

²⁹ 吉田注²¹同書、399頁。

³⁰ 秋葉実解説『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中』(北海道出版企画センター、1985年)127~128頁。

³¹ 渡部裕「アイヌの海獣狩猟と定住性—斜里、網走地方アイヌを中心に」(『定住と移動 第6回北方民族文化シンポジウム報告』北海道立北方民族博物館、1992年)。



図9.『蝦夷カラフトサンタン三ヶ所打込諸道具絵図』より「カシヤ」

⑥『蝦夷カラフトサンタン三ヶ所打込諸道具絵図』より「カシヤ」〔図9〕³²

「カシヤ」と書かれている脇に「笠」と書かれた付箋がつけられている。また、「是ヨリソウヤニテ写トリシ品」という注記がある。なお、この絵図の作者については、1792年（寛政4）に最上徳内らとともにサハリン島に渡った幕府西丸与力の小林源之助とする説がある³³。

⑦シーボルト『日本』Ⅶ第21図「樺太 衣服と装身具」より「藁帽子」〔図10〕³⁴

この図版のもとになったイナウカサが、現在シーボルトコレクションにあるかどうかはわからない。シーボルトは入手できなかった資料については、川原慶賀ら絵師に命じて絵に描かせて持ちかえった。したがって、シーボルトはイナウカサを収集していなかったかもしれない。またこの⑦図は⑥図に酷似しており、この図版の原図は、現物を描いたものではなく絵図を模写したものであった可能性が高い³⁵。シーボルトが江戸滞在中に最上徳内と交友があったことと³⁶、⑥の作者が小林源之助である可能性があることを考えあわせると、最上徳内から見せてもらった可能性が高いといえるのではないか。

³² 『蝦夷カラフトサンタン三ヶ所打込諸道具絵図』を含む『蝦夷カラフトサンタン打込図』全4巻は、現在、早稲田大学図書館特別資料室に収蔵されており〔請求番号：ル4-3699-1~4〕、カードには「三條家旧蔵」と記されている。内容は、『西蝦夷地所々所打込景地之図』『カラフト島東西打込景地之図』『蝦夷カラフトサンタン三ヶ所打込諸道具絵図』『蝦夷カラフト打込魚鳥口類家作絵図』である。

³³ 北海道開拓記念館編『第42回特別展図録「山丹交易と蝦夷錦」』（北海道開拓記念館、1996年）45頁。

³⁴ フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（末本文美士・石山禎一・八城園衛訳）『シーボルト『日本』図録第3巻』（雄松堂書店、1979年）102頁、357-2図。

³⁵ 林昇太郎・舟山直治・小林孝二・手塚薫「絵画史料にみる近世中期から明治初期の北海道生活誌—1995年度調査概要—」（『北海道開拓記念館調査報告』第35号、1996年）。

³⁶ シーボルト（斎藤信訳）『参府旅行中の日記』（思文閣出版、1983年）109~119頁。

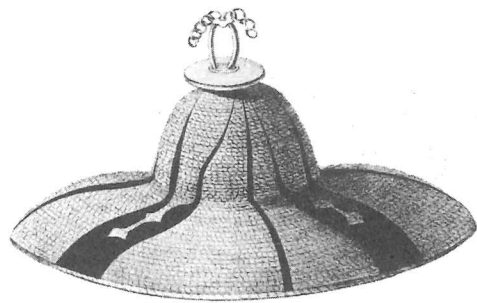


図10. シーボルト『日本』より「藁帽子」

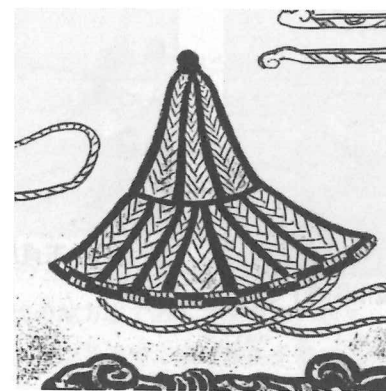


図11. 小玉貞良『蝦夷風俗図巻』より

⑥と⑦との比較で注目すべきことは、⑥がソウヤのものとされているのに、⑦は樺太（サハリン島）とされていることである。⑦の同じ図版に耳飾りの図があるが³⁷、これと同じ図が⑥にも収録されている。それには「是ヨリカラフト嶋ニテ写」と記されており、なぜイナウカサだけが一方はソウヤ、一方は樺太とされているのかはわからない。ちなみに、シーボルトが徳内の協力でまとめたアイヌ語彙集には、帽子に対して、日本語のkasa、蝦夷のアイヌ語のカツカ kakka、kasja、樺太（サハリン島）のchakaが収録されている³⁸。kasjaは⑥の「カシヤ」に対応するものであり、このことも両者の関係の深さを示すものであるが、ことばの面からいえばこのイナウカサは北海道のものとしなければならない。

さて、これまで検討してきたイナウカサの絵は、18世紀末から19世紀半ばの時期のものであるが、つぎのものは時期的には最も古く、18世紀の中葉にまでさかのぼる作品である。

⑧小玉貞良『蝦夷風俗図巻』より〔図11〕³⁹

貞良のアイヌ絵は、現存するアイヌ絵のなかで最も先行するものとされているが、貞良の経歴は、1759年（宝暦9）に奉納された絵馬があることがわかっている程度である。笠の上や縁の部分に青く筋のように描かれている部分は、松浦武四郎がいう鯨の髭などを用いた補強材とも思われる。全体の形状からみても、この笠はイナウカサである可能性がある。

小玉貞良には、つぎのような作品もある。

³⁷ シーボルト注³⁴ 同書、102頁357-5図。

³⁸ フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（加藤九祚・妹尾守雄・八城園衛・中井品夫・金本正之・石山禎一訳）『シーボルト『日本』第6巻』（雄松堂出版、1979年）138頁。

³⁹ この作品については、五十嵐聡美「小玉貞良『蝦夷風俗図巻』について」（『紀要1991 Hokkaido Art Museum Studies』1991年）に詳しい解説がある。



図 12. 小玉貞良筆『蝦夷国魚場風俗図巻』より



図 13. 小玉貞良筆『蝦夷国魚場風俗図巻』より

⑨小玉貞良筆『蝦夷国魚場風俗図巻』より〔図 12, 図 13〕⁴⁰

林昇太郎氏の紹介によれば、この作品は巻末に「松前産 小玉貞良筆 同貞良寫之」という落款があり、原画は⑧と同じ小玉貞良の作品とされている。アイヌの漁場労働を描いた一連の絵巻物のなかで、魚を網に追い込む場面〔図 12〕の櫓を漕ぐ男と、地引き網漁の場面〔図 13〕の網を引く男がイナウカサと思われる帽子をかぶっている。

以上の検討から、イナウカサについては、つぎのことがいえるのではないだろうか。現存するイナウカサはすべて木の削りかけで作られたものだが、草を編んで作られたものもあったようである(⑤)。ついで、イナウカサが作られていたのは主にサハリン島であるが、北海道のオホーツク海沿岸でも作られていた(④)。北海道でイナウカサが使われていたのは、オホーツク海沿岸から宗谷に及ぶ地域だが(④⑤⑥)、これらがすべて北海道で作られたものかどうかはわからない。ここはサハリン島に近接する地域でもあり、サハリン島から持ちこまれた可能性もあるからである。また、イナウカサを描いた最も古い絵は小玉貞良の作品であるが(⑧⑨)、貞良が松前在住の絵師であったことを考えあわせれば、彼の活動期とされる 18 世紀前半には、イナウカサが北海道の南部地域でも使われていた可能性がある。なお、イナウカサを用いるのは、アイヌの男性に限られるようである(②④⑤⑨)。少なくとも、アイヌの女性がイナウカサを用いた例は見あたらない。

このようなイナウカサの特徴を謝遂『職貢図』の記述と比較すると、両者がよく対応することがわかる。謝遂『職貢図』の「草の笠」・「草の編み帽子」とは、草を編んで作られたイナウカサのことであろうし、イナウカサがアイヌの男性のものであることは、謝遂『職貢図』でも「草の笠」・「草の編み帽子」が男性のものとされることに符合する。以上の考察から、謝遂『職貢図』の「草の笠」・「草の編み帽子」は、カラフトアイヌのイナウカサと考えてよいことがわかった。また、イナウカサがアイヌの男性のものとされていたことや、最も古い絵画史料でも 17 世紀にはさかのぼらないこともわかったが、これらのことは、イナウカサの成立を考えるうえで重要な情報といえる。

3. 山丹交易とイナウカサ

さきにのべたように、謝遂『職貢図』は 18 世紀半ばの成立である。ではそれ以前の中国史料にはイナウカサは登場しないのだろうか。中国史料にアイヌが登場するのは元代のことである。ただし、この時代の中国史料のアイヌに関する記述は断片的なものが多い。明代初期の地方志である『開原新志』(『大明一統志』巻 89、外夷、女直、所収)には、

苦元は奴児干の海の東に在る。人の身は多毛で、熊皮を戴き、花布を衣る。親が死ねば、腸胃を刳り、曝乾して之を負い、飲食のときは必ず祭り、三年の後に之を棄てる。

とある程度であり、これに続く明代の地方志である『遼東志』巻 9、外志、建州、でも、

苦元は奴児干の海の東に在る。身は多毛で、頭に熊皮を帯び、身に花布を衣る。木の弓を持ち、矢は尺余、毒を鏃に塗り、中れば必ず死ぬ。器械は堅利である。父母が死ねば、腸胃を刳り去り、屍体は曝乾して、出入に之を負い、飲食のときは必ず祭り、居処には敢て対しない。約三年に至り、然る後之を棄てる。

とあるのみで、まとまった情報ではない。ふたつの史料を読み比べてみればわかるように、『遼東志』は、『開原新志』を基に新たな情報を加えたか、或いは『開原新志』と共通の原史料から成立した史料である。ここで注目したいのは、両者には「熊皮を戴き」・「頭に熊皮を帯び」と熊皮のかぶりものについての言及はあるものの、笠(或いは編み帽子)についての記述がないことである。元・明・清代の史料が、ともに間宮海峡を越えたアイヌとの朝貢交易によって得た情報をもとに記述されている点では同質であることを考えれば、元・明代の記述に笠(或いは帽子)の記述がないことは注目すべきことである。また、17 世紀のアイヌの記録、具体的には 1618 年と 1621 年のアンジェリス、1620 年のカルワリーユの蝦夷報告などのイエズス会宣教師の記録⁴¹や、1696 年に北海道北部の礼文島に漂着した朝鮮王朝の下級官吏である李志恒の記録⁴²には、イナウカサについての記述がみえない。特に李志恒は、礼文島から宗谷に渡り、日本海岸を南下して松前に至る経路で移動している。さきにあげた⑥が宗谷で描かれたことが間違いなければ、李志恒の記録にイナウカサがみえないことは説明がつかない。

このことをどう考えるべきであろうか。ひとつには、前記の諸記録からもれたと考えることができる。だが、断片的な元・明代の中国史料ならいざしらず、アンジェリス、カルワリーユや李志恒の記録が比較的詳細で客観的であることを考えれば、その可能性は低いといわなければならない。ではどう考えるべきなのか。ここで筆者が注目したいのは、北方諸集団が清朝へ朝貢した際に与えられた品のなかに帽子があったことである。

清朝は朝貢にやってきた北方の諸集団を辺民という組織に編成した。清朝からハラタ(姓長)・ガシャンタ(郷長)などの地位を与えられた者は、朝貢の際に、清朝が彼らに与えた地位に応じた蟒袍や帽子などの品物を下賜された⁴³。清朝の官吏がかぶる冠帽には、朝冠・吉服冠・雨冠の三種があり、さらに朝冠には冬朝冠と夏朝冠の二種があった⁴⁴。冬朝冠は皮で作られていたが、皮をあらわにしているのは縁部

⁴¹ H・チースリク編『北方探検記一元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書一』(吉川弘文館、1962 年)。

⁴² 池内敏「李志恒『漂舟録』について」(『鳥取大学教養部紀要』第 28 巻、1994 年)。

⁴³ 佐々木史郎『北方から来た交易民一絹と毛皮とサンタン人』(日本放送出版協会、1996 年) 190～191 頁。

⁴⁴ 瀧川政次郎『清代文武官服制考』(『史学雑誌』第 53 編第 1 号、1942 年)。

⁴⁰ 林昇太郎「描かれた地引き網漁—小玉貞良筆『蝦夷国魚場風俗図巻』の紹介—」(『北海道開拓記念館調査報告』第 35 号、1996 年) 45 頁。

のみで、帽の上部はすべて朱毛で覆われており、この朱毛を絨纓という。帽の頂上には金色の座があり、座の上に金具がある。さらにその上に宝石が飾られるが、座より上の部分（頂戴）は官吏の品位によって異なる〔図14〕⁴⁵。夏朝冠は玉草や藤・竹絲で作られ⁴⁶、絨纓や頂上の飾り、風が強いときにあごにかける櫛というバンドがあることなどは冬朝冠と同じであるが、冬朝冠より大きい〔図15〕⁴⁷。朝冠のなかでも、瀧川政次郎氏が紹介する夏朝冠〔図16〕の形状は、イナウカサのそれによく似ている⁴⁸。両者の間になにかの関係があるとは考えられないであろうか。そう考えれば、②の資料が「夏の帽子（イナウカサ）」とされていたことにも、もう一度注意を払ってみる必要がある。また②には、櫛と同じようなバンドがついている⁴⁹ことも注目に値する。

朝貢に際して、帽子を与えることはアムール河の中・下流域では19世紀末まで続けられたらしく、佐々木史郎氏は、旧ソ連邦時代にナーナイのもとから収集された帽子と満洲語の任命辞令を紹介している⁵⁰。佐々木史郎氏が紹介した、サント・ペテルブルグ人類学民族学博物館所蔵の帽子は冬朝冠のようであるが⁵¹、間宮林蔵『東韃地方紀行』巻之中には⁵²、

官吏衣服、大抵繻子・純子の類を著し、雨中の時紺羅紗の衣を服す、其製、図の如し。冠は藤を以て造れる笠の上に紅糸をかけ、金丸を頂上に飾る。

とあるように、夏に朝貢を受けアムール河下流域までやってくる清朝の官吏は、当然のことながら夏朝冠をかぶっていた。この地域で下賜された帽子がどのようなものであったのかは、今のところ明らかにできないのだが、夏朝冠が与えられたこともあったと考えるべきではないか。もしそうであるとすれば、つぎのように考えることができないだろうか。

清朝からの下賜品がサハリン島を中心としたアイヌ社会に恒常的にもたらされるようになる過程で、本来はハラタ・ガシャタなど清朝から位を与えられた者の身分標識であった蟒袍や朝冠が、アイヌ社会に受け入れられる。蝦夷錦とよばれた蟒袍は、和人社会との交易において高い交換価値を持つがゆえに、比較的早くアイヌ社会から流出していくが⁵³、帽子は和人社会にも同じ用途を持つものがあるため、さほどの価値を持つことなくアイヌ社会に留まる。やがて、朝冠の形をまねた編み笠、つまりイナウカサが出現することになるのではなかろうか。

アイヌのかぶりものは、熊皮や木綿などで作った頭巾のタイプのものが一般的であり、木の削りかけや草の繊維で編んだ笠（帽子）は極めて珍しい。また、なぜイナウカサがサハリン島を中心とする地域

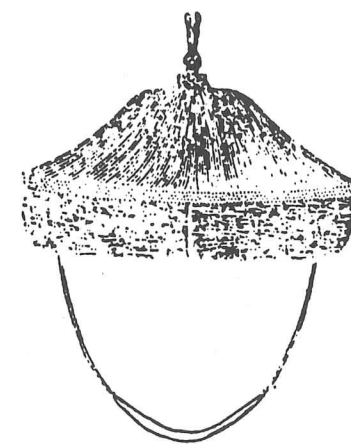


図14. 允祿等撰『皇朝礼器図式』
巻5より「文九品冬朝冠」

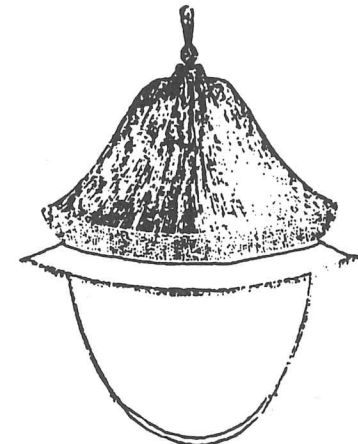


図15. 允祿等撰『皇朝礼器図式』
巻5より「文九品夏朝冠」



図16. 夏朝冠

に分布するのか、なぜアイヌの女性に受容されなかったのか。これらの疑問は、笠（帽子）というものの機能やアイヌ社会と南の和人社会との関係からでは説明できない。一方このことを清朝の辺民支配体制との係わりで見れば、男性が利用していること、北海道よりもサハリン島に多いことなどの理由を説明することができる。あくまで推測の域を出ないが、筆者は、イナウカサの出現は清朝のアムール河中・下流域およびサハリン島への進出以降のことなのではないかと考えている。つまり筆者は、17世紀半ばにアムール河中・下流域およびサハリン島における清朝の辺民支配体制が確立し、清朝への朝貢交易が安定化することが、イナウカサの出現と密接に関係するのではないかと考えるのである。

つぎに紹介する事例は、イナウカサの出現に関連づけて考えることができる。

⁴⁵ 允祿等撰『皇朝礼器図式』（広陵書社、2004年）205頁。

⁴⁶ 『中国衣冠服飾大辞典』（上海辞書出版社、1996年）51～52頁。孫文良主編『満族大辞典』（遼寧大学出版社、1990年）510頁。

⁴⁷ 允注⁴⁵ 同書、205頁。

⁴⁸ 瀧川注⁴⁴ 同論文、29頁。

⁴⁹ 佐々木利和氏のご教示による。

⁵⁰ 佐々木史郎「レニングラードの人類学民族学博物館所蔵の満洲文書」（畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会、1991年）。

⁵¹ 佐々木史郎「山丹交易」（榎森進編『アイヌの歴史と文化I』創童舎、2003年）199頁。

⁵² 間宮林蔵述・村上貞助編（洞富雄・谷澤尚一校注）『東韃地方紀行他』（平凡社、1988年）146～147頁。

⁵³ 拙稿「山丹服とアイヌの衣文化」（『シンポジウム アイヌの衣服文化』アイヌ民族博物館、1994年）。

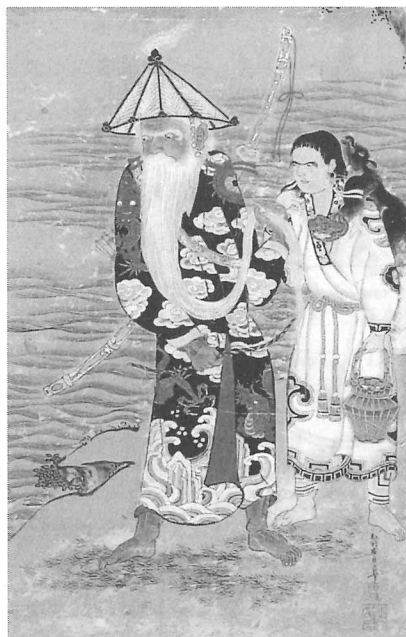


図 17. 小玉貞良『アイヌ盛装図』

⑩小玉貞良『アイヌ盛装図』〔図 17〕

男女 2 名のアイヌが浜辺にたたずんでいる構図だが、男がかぶっている帽子は、形は異なっているものの、帽子の斜面や縁の筋のようなものは、⑧と同様に補強材を念頭に置いて描いたのかもしれない。男性が着ているのは蝦夷錦とみられるし、女性が着ている白地の衣服はカラフトアイヌによく知られるレタラペ(草皮衣)である。総じてサハリン島や大陸に連なる風俗ということができ⁵⁴、帽子は形状から見てイナウカサとはいえないが、北方世界との関係を強調する意図で描かれたことは間違いがない。

⑪新井質『蠢動変態』より「宗耶酋長長剣肖像図」〔図 18〕⁵⁵

新井質は、1789 年(寛政元)に松前を訪れた儒学者である。その時の見聞をもとに『蠢動変態』を描いた。帽子をかぶり、蝦夷錦を着て太刀を背負う男が描かれている。⑩と同様に、北方世界との関係をうかがうことができる。また林昇太郎氏は、この人物が⑩の男性と同一人物であるとのべている⁵⁶。

⑫谷元旦『蝦夷器具圖式』より「笠」〔図 19〕⁵⁷

谷元旦は、1799 年(寛政 11)に松平忠明が海岸防備のため蝦夷地に赴くにあたり、絵図面師として一行に加わっている。大塚和義氏は「この笠は明らかに、清朝の官吏が被る様式のものである。……清朝



図 18. 新井質『蠢動変態』より「宗耶酋長長剣肖像図」

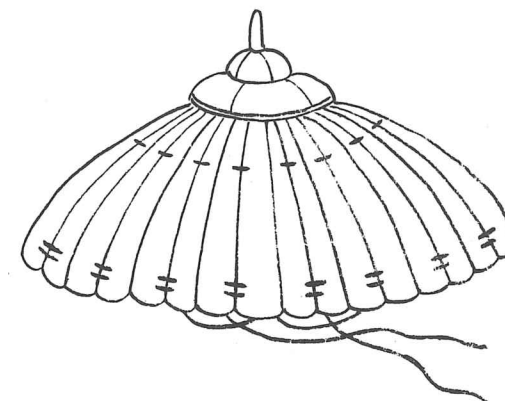


図 19. 谷元旦『蝦夷器具圖式』より「笠」

官吏がそのステイタスシンボルである笠を、異族である先住民に贈ったのである。正式には官吏が従属させる先住民の支配者に対して、頭領などの階位を与えたときにしか、このような笠を贈ることをしないからである。」としている⁵⁸。なお、彼の兄の谷文晁筆の『蝦夷山水器物図巻』にも同様の図が収められている⁵⁹。

⑪は宗谷の酋長を描いたものである。⑩が⑪と同一人物を描いた可能性があり、さらに山丹渡りの品物とともに帽子が描かれていることは、その史料の信憑性については吟味が必要であるものの、イナウカサがサハリン島から北海道の北部や東部のオホーツク海沿岸に分布することに対応するのかもしれない。またこれらの帽子は、編み笠を念頭に置いて描かれているように見えるが、頂上部の毛の束のようなものとあわせて、実際にこのような帽子があったのか、それともイナウカサの描きくずれと考えるべきなのか、今後の検討課題としたい。また、⑫は北方からもたらされた笠にはいくつかの種類があった可能性を示唆するものといえる。

おわりにかえて ― 今後の課題

カラフトアイヌのイナウカサの成立について、清朝との朝貢交易の視点から私見をのべてきたが、本稿で詳しく触れることができなかったいくつかの問題について、簡単に触れておきたい。

まず、アイヌ以外の諸集団では清朝の帽子はどのように受容されたのであろうか。この点については、間宮林蔵『東鞆地方紀行』巻之中の「脱衣易皮」〔図 20〕にイナウカサをかぶる男性が描かれている以外は明らかにできない。あるいは、かぶりものという点からいえば、各民族の髪容の違いが関係しているのではないかと考えられる。特に、朝冠は満洲人の辮髪と不可分の関係にあったであろうから、アムール河沿いの「剃髪黒金」・「不剃髪黒金」などと呼ばれる諸集団では、朝冠の受容のされかたにも差異が

⁵⁴ 手塚薫「絵画史料にみるアイヌ盛装風俗の変遷とその背景」(『北海道開拓記念館調査報告』第 35 号、1996 年)。

⁵⁵ Calogue de l'exposition «Les Aïnos-Peuple chasseur, pêcheur et cueilleur du Nord du Japon», organisée dans le cadre d'Europalia Japon, ed. par le Crédit Communal, Bruxelles, 1989, p. 154.

⁵⁶ 手塚注⁵⁴ 同論文。

⁵⁷ 谷元旦(大塚和義監修)『蝦夷風俗圖式・蝦夷器具圖式』(安達美術、1991 年)。

⁵⁸ 大塚和義「民族誌としての内容分析」(注⁵⁷ 同書、所収) 54 頁。

⁵⁹ 『「蝦夷の風俗画—小玉貞良から平澤屏山まで」展図録』(北海道立旭川美術館・北海道立近代美術館、1992 年) 25 頁。



図 20. 間宮林蔵『東韃地方紀行』巻之中「脱衣易皮」

あったであろう。特にアイヌは、前頭部を剃りあげる髪容が一般的であった点では辮髪と通じるものがあったから、朝冠の受容は容易であったのかもしれない。

つぎに、イナウカサはいつごろどのように消滅したのであろうか。清朝の辺民支配体制は、18世紀の終わりころには形骸化がはじまる。あるいは、朝貢に対する賞賜品もほかのもので替えられることが行われていたようである。たとえば帽子などに替わって毛青布（毛羽だてた木綿）を与えることが行われていた⁶⁰。間宮林蔵の記述をみるかぎりにおいては、帽子が与えられたようには見えない。このように、清朝の支配力が弱くなるにしたがい、イナウカサの持つ政治的な意味あいも薄れていったのであろう。

また、北海道では別の事態が進みつつあった。さきに引用した松浦武四郎『久摺日誌』には、ビホロで出会ったシユイヘリキンという老人から貰ったイナウカサの話がある⁶¹。

其シユイヘリキンと云は餘程の老年なるが、メナシ亂〔寛政元酉年〕の時にも出たりとて其話を致しぬ。惣て山住には八十餘歳の者は多く有と。手當等遣したるに我が笠の破たるを見て、自ら作りし笠を呉たり。依て問ふに、蝦夷人等は雨降ても笠をも用ひざるが風俗かと思ひしが笠も有るやと云に、答けるは、いかに我等とて雨に濡れ、雪にかゝりて快^{こころよく}もあらざれば、昔より簑笠も有るなり。されど其を作る暇無故に雨雪にかゝり歩^{あるきゆく}行事なり。我は山住なれば暇有る故に作りて用ゆとて、又楡皮もて編し簑を見せけるが頗る面白き物なり。其心切實に感ずるに堪たり。

武四郎が、アイヌは笠を用いないのではないかと尋ねたのに対し、シユイヘリキンの答えは、我々には昔から簑や笠はあるのだが、今はそれを作る暇がないため、雨や雪に降られてもそのまま歩いているのだ、というものであった。シユイヘリキンが、自分は「山住」だから暇があるのだと述べている点は注目に値する。ここでいう「山住」とは、海岸の漁場の漁業労働者とされているアイヌの人びとと対比された語であろう。武四郎は、場所請負体制下で民族の生活文化を喪失しつつあった者と、漁場経営に

包括されなかったために、生活文化を保持している者との格差を強調している。また武四郎は、「山住には八十餘歳の者は多く」いると述べている。事実、シユイヘリキンは1789年のクナシリ・メナシの戦いに参加したと述べているから、武四郎と会った1858年（安政5）当時、80歳は越えていたと思われるが、このように「山住」に長命者が多いのも、場所請負制の展開と何らかの関係があるのかもしれない。

イナウカサは、北海道ではそれほど一般的に使用されたものではないであろう。ただ、武四郎の紹介する事例が、アイヌ社会の自立性が比較的後の時代まで保持されたオホーツク海沿岸であることは注目してよい。イナウカサを作る習慣は、北海道でも、地域によっては19世紀半ばまでは保持されていたが、やがて忘れ去られてしまったと思われる。その背景には、場所請負制の展開があったのかもしれない。

〔謝辞〕本稿を草するにあたり、以下の諸機関から図版の提供を受けました。感謝申し上げます。特に、国立故宮博物院の林天人先生ならびに蔡奇材氏には大変にお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

図1. 国立故宮博物院（National Palace Museum）

図4. 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

図9. 早稲田大学図書館特別資料室

〔付記〕本稿を草するにあたり、秋野茂樹・内田祐一・古原敏弘・佐々木史郎・佐々木利和・鈴木邦輝・津曲敏郎・林昇太郎の諸氏よりご教示をいただきました。末尾ながら感謝申し上げる次第です。また、秋野氏と林氏はすでに鬼籍に入られました。心よりご冥福をお祈りいたします。

⁶⁰ 拙稿「蝦夷錦と山丹交易」（『北海道高等学校教育研究会研究紀要』第24号、1987年）。

⁶¹ 吉田注²¹ 同書、398～400頁。

SHI HŌ

No. 45

December 2012

CONTENTS

ARTICLES

- Norio OKUYAMA The Zōng bīng guān (総兵官) during Míng (明)
Xuān dé (宣德) period (1) (1)
- Kazuyuki NAKAMURA On Ainu's Inaukasa found in “Zhigongtu (職貢
図)” by Xie Sui (謝遂) (1)

MISCELLANEA (38)

published by

THE TŌYŌSHI-DANWA-KAI

Hokkaido University (Sapporo, Japan)